

日本年金機構理事長賞 奈良県 白木 優子 様 （60代 女性）

小学生だった頃、社会科で、年金の仕組みを習いました。10 才位の私は、年金と言われても、60 才が先の事すぎて、実感も感心も、さほどなかったと思います。その時に先生は、「働いて納めていき 60 才になれば、自分で請求して給付される。何もしないといただけなので、忘れない様に請求しましょう。」と教えて下さったのを覚えています。

高校を卒業して銀行に勤めて、いただいたお給料からは厚生年金が引かれていました。少ない給料から引かれる税金や年金が引かれなければ、手取りも増えるのにと、よく同期達と話しました。五年務めて、専業主婦となり、三人の子供達に恵まれました。末っ子が小学生になった頃から、元の職場に戻り、パート勤めをしましたが、厚生年金を掛けるのは叶いませんでした。今となっては、とても残念です。子供達には、老後、穏やかに、幸せに暮らしていける様に、若い時に「働いて納める」という当たり前の事を頑張っていくようにと話しています。年金をいただき始めた私が、年金の有難さを教えてあげる事が、親の務めであり、子供達の幸せにつながると信じているから。

私の両親は、家内工業で、一枚縫って何銭の蚊帳や、数円にしかないふとんカバーを縫って三人姉妹を育ててくれました。貧しい家計から国民年金代は必ず袋に入れて納付していました。老後、娘達に迷惑をかけたくないと、一生懸命働く後姿を見てきました。両親が亡くなった後、丁寧に貼り付けた領収証を見た時、両親の働く意欲にもなっていたのだと思いました。

父は晩年、年金事務所から、戦後、進駐軍で働いておられた時の年金をお忘れではないですか、というお知らせを頂いていました。一人では動けなかった父の代わりに、私が年金事務所に行きました。勤めていた時の住所や、年金を掛けていたかと尋ねられました。父が大切にしていたアメリカ兵の方と一緒に写っている写真を持っていきました。

五十年も前に、進駐軍で二年少し働いて、納めた少ない年金を探してくださり、とても親切に優しく対応して下さいました。父が受け取るための手続きをして下さり、入院費用に充てる事が出来て、とても有難かったです。

私は、自分も六十五才になれば、年金が受け取れると思っていましたが、六年前に、ス

ページⅢの乳癌を宣告され、手術をしました。深い悲しみの底に一人で漂っていた時に、私は年金を頂けるまで生きたいと、強く思いました。山あり谷あり、ひとつ山を越えると又その先に山がありと、平坦な道ではありませんでしたが、医師、家族、友人、色んな人達に支えられ、生かされている幸せを実感しています。孫は、十五才になりました。サッカーが大好きでキャプテンとして頑張っています。保育士として働く娘を助けるために、孫を育てる協力をさせてもらい、楽しい時間を過ごしました。その孫も、あと五年で年金を納める年齢になります。今度は、私達が、支えてもらう事になります。主人共々、健康で、長く年金を受け取り、幸せに暮らせる様に長生きしたいと思います。